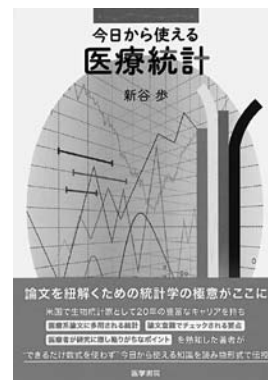


BOOK Review

今日から使える医療統計



評者 香坂 俊 慶應義塾大学循環器内科

自分は最近、無謀にも臨床系の大学院を開設するなどして¹⁾、院生と循環器疾患の大規模レジストリからの分析を行ったりしている。そこでよく「統計難しいっすね」などという趣旨の発言を耳にしたりもするのだが、厳密にはそれは間違った認識であると思う。

実は統計の理論そのものはそれほど難しいことではない。高校数学の新課程では「データ解析」が【数Ⅰ】に織り込まれ(2012年～)、高校生でもその基本的なコンセプトは習得可能、とされている。実際、進研ゼミのQ&Aなどをみても十代にして彼らの理解度は恐ろしく高い²⁾。

なので、極端なことを言えば、統計解析というのは足し算や引き算のような演算の一種であり、統計家は電卓である(註)。ただここで問題なのは、

医療者が考えるほど統計という学問も「カッコリ」したものではなく、逆に医学という学問も統計家が思うほど「キチッ」としていない

ということではなかろうか。日常の臨床には非常に多くのヒューマンファクター(目に見えない交絡因子)が存在し、それを互いが認識し、共同作業で補正していかないときちんとした研究を行うことはできない。

そこで本書『今日から使える医療統計』である。これまで数多くの統計系の書籍が出版されてきたが、どこか「カッコリ」した教科書が多く、実践とはかけ離れている感があった。本書はそうではなく、現役の第一線で活躍されている統計学者の新谷先生が極めて現実的な視点でポイント絞った解説をしてくれている。記述統計の項から入り、終盤にはロジスティック回帰分析や生存解析の多変量解析モデルや、最近の医学論文では当たり前目にするようになった

c-statisticsやnet reclassification improvementの内容までもカバーしている。

特筆すべきは、新谷先生が米国でGrant(研究費)の申請を行ったり、あるいは論文の査読を行ったりする立場の人物であるということである。そうした立場の方の生の声はなかなか聞こうと思っても聞けるものではない(しかも、日本語で!)。中でもパワー計算(必要な症例数の算定)に関する率直な議論や、重回帰分析を行うにあたっての共変量の考え方など、まさに多くの方々が解答を見つけれずにいる問題ではなかろうか?

現代は、良くも悪くも、クールに大量のデータが手に入る時代になった。ここで問われるのはそのデータの「質」の評価、そしてそれを解釈するための正しい疫学や医学統計知識であろうと感じている。新谷先生も前書きで述べられている通り、残念ながらわが国の医療統計を取り巻く環境は未発達である。Evidence Based Medicineに必須な知識を少しでも高めていただくため、ぜひ論文を読み始めた方々、あるいはこれから自分で疑問を解決しようという方々に、一読いただきたい好著である。

(註)筆者は実際に統計の専門家からそのように自己紹介されたことがあり³⁾、統計家の先生方に悪意があるわけではありません。

文献

- 1) 慶應義塾医療科学系臨床研究大学院: <http://www.cpnet.med.keio.ac.jp/research/>
- 2) <http://kou.benesse.co.jp/nigate/math/>
- 3) Kohsaka S, Sciacca RR, Sugioka K, et al: Electrocardiographic left atrial abnormalities and risk of ischemic stroke. Stroke 36: 2481-2483, 2005

新谷 歩 著

A5判/176頁/2015年/定価(本体2,800円+税)/ISBN978-4-260-01954-5/医学書院 刊